

# 雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

新樹

小林貴子

戸なきからを高きへ運び新樹の夜  
水色の綺麗な毛虫誰のため  
短夜や遺句集しばし掌  
水に足ひたすが如き若葉冷  
胸内に夏蝶を飼ふよすがあり  
光降る椅子に読書やアイスティー  
座るべく椅子くぼみをり愛鳥日  
夏安居やまとひてみたき蓮の衣  
羽抜鶏己見えぬを幸ひと  
囀に邪魔されてゐる音合せ



浅草馬道

佐藤映二

笛は七穴六本調子祭来る  
花ユツカめぐり浅草馬道へ  
浅草馬道薄暑最中屋篠笛屋  
幻聴にあらず海の日の軍艦マーチ  
閨門の錆ぶる錆ぶると行々子  
沖繩忌礎いしじに手置きかむちやあぶし子持節

四季と折り合つ

佐藤映二

六月二十六日、盛岡駅の西方十五kmにある繋温泉の宿で岳東北支部総会と主宰指導句会が催された。万緑の岩手山(標高二〇三八m)やその西に位置する秋田駒(同一六三七m)の頂き近くには、八の字型ないし帯状の残雪が手に取るよう。この〈青嶺〉に〈残り雪〉の景をなんとかして一句に、と逸る気持を抑えがたい。

二日目も快晴で、岩手山の南麓にあたる小岩井農場のガイドさんもこの時期の残雪は珍しいと。しかし、それより驚い

たのは、天然の冷蔵庫が明治三十八年から昭和二十七年ごろまで稼働していたとのこと。農場で造るチーズの保管と夏場のバター瓶詰め作業などのためだった。その構造はといえば、敷地内の小山を横に掘り進め内部は煉瓦とモルタルで固めたあと、外気を土中に貫く鉄管内に取り込み、暖気は上部に逃がすというもの。許しを得て鉄扉の内部に入ると、寒暖計は摂氏十度を示し、一年中この程度の涼しさが保たれていたという。あの宮沢賢治も何度か小岩井駅から徒歩でここを訪れ、馬車の喇叭が聞こえるたびにスイスのどこかを連想するなど、彼の最長編の詩「小岩井農場」に書いたのだった。